日刊 動労千葉
79.7.25
No. 181
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二-一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）(0472)(22)七二〇七

労農連帯を一層強め、三里塚・ジェット闘争を貫徹しよう！

権力裁判所に泣きついた「本部」弾劾！

さらに動労大改革にむけ前進を！

動労千葉の組合員のみなさん。八日動労全国大会（於熊本）を前にして動労千葉の組織と動労大改革運動は着実に前進している。全国大会を一ヶ月後に控えた七月九日の動労一〇五臨中委では、ついに動労内革マル分子による組合私物化許すまじの決意を込めた決起として「組織の統一と団結強化に向けての特別決議」が提起された。そしてヤジと怒号に屈せず心ある中央委員は「除名反対」「オルグ中止」の意志表明を行ったのである。この一〇五臨中委の特筆すべき一〇地本（秋田・仙台・宇都宮・水戸・長野・名古屋・福知山・米子・門司・鹿児島）と事務分科選出の中央委員の決起こそ、動労四万七千組合員の真の声であり、いまや動労大改革運動は全国的に伝播し確実に前進している情勢の反映であるのだ。

「再建」策動完全敗北を自認＝告訴路線

七月二三日、「本部」革マル反動集団は、関川委員長以下現動労千葉執行部役員に対し、昨年一二月から本年二月迄の組合費を請求する訴訟を東京地裁に訴えでたそうである。このことは全国の動労内の「造反」「決起」を押さえることができず、動労千葉の確固たる団結力によって「千葉地本再建」なる組織破壊攻撃に万策つきはてた、彼ら反動集団の敗北を自認する姿である。結局、「本部」革マル反動分子は、わが動労千葉に対し暴力と甘言、デマとケチッケという、およそ労働組合から逸脱した反動的攻撃を用い、「延べ三万人」の動員と「一億数千万」の貴重な組合費をつぎこんでも、動労千葉の団結を崩すことはできないという焦りと、口惜しさをせめて裁判に訴えて組合費だけでもとろう等という末期的な姿をさらけだしたにしかすぎない。

「組合費二重徴収」論のデマ性を自己暴露！

「再建旗上げ興業」に完全に失敗し万策つきはててしまった「本部」は、今日デマ宣伝の主要な柱に「組合費二重徴収」論＝（動労千葉は「二重国籍」だから組合費を二重に払う義務が生じた。裁判に訴えてでも「組・合・員・一・人・一・人・か・ら・徴・収・する」なる暴論）をコジツケて、脅迫したつもりでいたのであるが、今回の「告訴」の暴挙の中で、そのデマ性をはしなくも暴露してしまった。

天下周知のように3・30動労千葉結成とそれに続く各支部結成、団結署名は、自らの納入した組合費を含む、旧千葉地本の全ての財産を、関川委員長以下の現動労千葉本部に全面的に移譲するという意志表示を徹底した討論を通じて大会決定し、その現実的な運用を委任しているのであって、いかなる理由といえども自らの組合費をどの組織に納入するのかは、各個人の自由な納入意志・信頼関係によって決められる筋合のものである。〈津山大会以降果すべき当然の義務も果さない〃本部〃が、組合費をとり立てる権利だけを主張するのは、一種のサギ行為に他ならない。〉

今回、「本部」反動集団は、権力に泣きついた訴状に、動労千葉本部執行部役員個々人名を上げているそうである。所詮その程度のものなのだ。何とか一人でも「動労千葉の組合員をやめてほしい」とはかない願望をいだいて、「団結署名をした一人一人全員を告訴・・」と脅迫してきていたことが所詮ムリなコジつけであることを自己暴露してしまったのである。

一四〇〇のさらなる団結・前進を！

この間、「日刊動労千葉」で動労全国大会方針を批判してきた。その内実たる運動路線は、「水本問題」をもって動労のセクト支配をより純化し、労農連帯に敵対し、国鉄三五万人体制攻撃に屈服し国鉄労働者の生活と権利を売り渡さんとするものである。その前兆が動労運動の変質を正すわが動労千葉の闘いを、権力に売り渡さんとする攻撃として今回、「告訴」＝泣きつき路線に走ったのである。権力の手を借りて「千葉再建」を策すという路線に踏きった動労「本部」革マル反動集団を弾劾し、全支部結成を勝ちとり、7・28大集会を圧倒的に成功させ、さらに団結固く動労大改革を推進しよう。

7・28国民大集会

午後5時半
千葉市民会館

戸村一作氏
三里塚闘争と動労千葉のたたかいが八〇年決戦をきりひらくことは明らかだ。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！